

ポストコロナの
世界を考える

9つの
イシュー

 TAKENAKA

2021
-
2022

2019年冬にCovid19が発見されはや2年半が経過した。東京本店イノベーションチームWI²（ワイスクエア）では2020年に都市空間の中で欠かすことのできない「働くための空間」をテーマに、これからの仮説と検討施策を『with/afterコロナの世界で、働くための空間を切り拓くには。未来へ導く7つのヒント』

(<https://www.takenaka.co.jp/newnormal/workstyle/>)としてまとめ、お客様との共創のツールを発行した。

今後のafterコロナの世の中のあり方について、各種メディアなどで取り上げられ、顕在化あるいは一定の方向性が共有されつつある。が、実はまだ我々が気づいていない大きな流れがあるかもしれない、その端緒から次の社会に向けて何をデザインすべきかを見つけるために、あえてエッジの効いた意見・ライフスタイルを持つ、想定できない「極端な実践者」＝「エクストリーマー」にインタビューを取ることで、良質な洞察やテーマを抽出するという仮説を持った。

対象は、完全にリモートを実現した方、このコロナ禍で新しい取り組みを始めている若者たちのグループ、コロナ禍の営業活動を通じナイトカルチャーを探る方、海外での実践者など、幅広くかつ実践的な取り組みをしている方とした。また、その過程でインタビューの対象を、このコロナ禍であえいでいる未病の方や子供たちをサポートしている方々にも広げ、あわせて9つの個人・グループを対象とした。

今回取りまとめた、9つの「イシュー」は、今後の議論を飛躍させ、新たな気づきを得るための「種」であり、この「種」を蒔くことにより、竹中工務店が様々なお客様やステークホルダーと共に、これらの建築・まちづくり、ひいては社会のあり方について対話を行い、探っていくためのきっかけになると考えている。

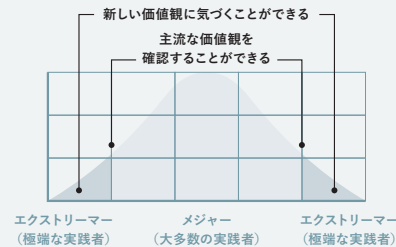
process

仮説立て

昨年まとめた「with/after コロナの世界で、働くための空間を切り拓くには。未来へ導く7つのヒント」以降の大きな流れや洞察の中で、まだ把握できていない「新たな気づき」「別角度の気づき」を得て、視点をアップデートする必要がある。

エクストリーマーインタビュー

気づきのベンチマークとなる、エッジの効いた意見・ライフスタイルを持つ想定できない「極端な実践者」＝「エクストリーマー」にインタビューを実施。



気づきの共有と問いの抽出

インタビューから得た気づきをWI²内で共有し、ポストコロナを考えるにあたって9つのイシューを抽出。

活用

さまざまなプロジェクトや活動に際して、ヒントや議論のきっかけとして本レポートを活用。

Contents

page 01

EXTREASMR INTERVIEW

リモートとリアル
ハイブリッドで進化する
HITACHI のマネージャー

豊田 大輔 氏

日立製作所 金融システム営業統括本部



ISSUE
#01

page 02

EXTREASMR INTERVIEW

編集者という多角視点な仕事の経験を活かして
人と場所、個性を活かした場づくりを

中村 光恵 氏

リトルメディア代表



ISSUE
#02

page 03

EXTREASMR INTERVIEW

20代前半を生きる若手クリエイターたちの
コミュニティの作り方

片桐 結氏 高橋 ランディ氏
Takumi 氏

Fuelwa-1



ISSUE
#03

page 04

EXTREASMR INTERVIEW

自分のキャリアを
しなやかにしたたかに積み上げる

山下 ぼぶ氏 三富 瑠音氏
黒沢 鑑人氏 Showhey 氏

Fuelwa-2



ISSUE
#04

page 05

EXTREASMR INTERVIEW

大組織から起業、コロナを経て手に入れた
Wellbeing な暮らし

Ashley Haln 氏

ヘルシードリンク会社CEO



ISSUE
#05

page 06

EXTREASMR INTERVIEW

雑談中から会話が生まれ、呑みが生まれ、
信頼が生まれ、仕事生まれる

清水 祐亮 氏

元TRUNK HOTEL 営業マネージャー



ISSUE
#06

page 08

EXTREASMR INTERVIEW

医療界を改変する若き精神科医が描く
医療と街の未来

田澤 雄基 氏

精神科医・研究者・経営者



ISSUE
#08

page 09

EXTREASMR INTERVIEW

保育士はファシリテーター
子どもを通すと見えてくる社会や
コミュニティの未来

小竹 めぐみ 氏
小笠原 舞 氏

こどもみらい探求社・保育士起業家



ISSUE
#09

👤 リモートワークの環境を
誰がどうデザインするのか？

👤 リモートワーク下での
コミュニティーのありかたとは？

👤 会社らしさ、マネジメントスタイルの変化に
どう対応するか？

EXTREME INTERVIEW

リモートとリアル
ハイブリッドで進化する
HITACHI のマネージャー

豊田 大輔 氏

日立製作所 金融システム営業統括本部

2002年日立製作所入社。5人の部下を持つ金融ビジネスユニットの管理職（2021年8月当時）。

2020年3月における初めての緊急事態宣言から完全在宅業務に移行。マニュアルもないまま事業体ごとに試行錯誤するが、1週間も経たないうちに仕事環境が整った。当初は、まさかこういう働き方をここまで長く続けなければいけなくなるとは全く想定してなかったが、長引くにしたがって、今はそれがかなり定着しており、元に戻る必要はないと考えている。自宅のリビングが主な仕事場。昼にランニングをするなど、リモートワークを楽しんでいる。新卒育成などのマネジメントの課題は抱えているものの、日立製作所においてはリモートワークで働くことが標準になって行くだろうと語る。



出社する価値がオフィスには必要

僕はシステムインテグレーションを売ることを生業にしているんですけど、僕らが提供している価値、その世界も基本的には、かなり自宅からリモートで開発できる環境が整っています。今まで1ヶ所に何百人も集まってそこで開発するっていう形だったんですけど、そういう時代がもう終わりつつあるのかなとは感じています。かつては1ヶ月に1回くらいはチームメンバーで集まる企画をやっていたりしていました。しかし、緊急事態宣言中はそれさえも会社として承できないということだったので、難しくなってますね。僕が話を聞く限りでは基本もうみんなリモートと思ってます。

対面でしか得られないメリットって言うのも相当あると思います。ただ、やっぱりものすごい費用なんですよ。ビルを借りるだけで原価が相当上がる。価値を創造していくっていう議論に関して、対面じゃなきゃいけない、コストをかけてまでやらなきゃいけないことなのか、見極めが必要です。

例えば、毎週ベトナムのメンバーに入ってもらってミーティングしてるんですけど、前までは考えられなかったようなことがリモートによってしやすくなるのかなと思いますね。

リモートとリアルのハイブリッドでもっと進化できる

ワイガヤにはワイガヤのいいところもあるんですけど、結局何かいいアイデアが生まれて進んでいくとこきて、コアになる人がいるんですよね。逆に「これやりたいんだ」というモチベーションの人がいない限り、どんなにいいプランでもそんなに進まないっていうのはありますね。

最初は、対面の方がベターではあるんですけどマストではないですから。そういう呼びたい人たちが忙いので、物理的に集まったらそれだけ大変だと思うんですよね。それだけの価値がそれにあるのか。本当に集まってやることによって、リモートでやった時と比べて、発想で出てくるものに違いがあるのかっていうと、それよりもそれぞれが持っている知識とか、結び付け方とかの方が、パワーが必要なのではと思っています。

リモートは手段の話

2020年3月の初めての緊急事態宣言から完全在宅業務になった当初は、必死に働いて、寂しいと思う余裕がなかったというのがパッと思い浮かぶ印象ですね。リモートの問題っていうよりも自分たちの提供価値が何なのかっていう方が何十倍も問題っていう感じですね。

たまたまコロナが来てワークスタイルが変わったけど、ワークスタイルの変化みたいな話は手段の話で、価値提供についての探求というのは、全然終わってないと思います。

🗨 Interview / 2021.08.04 オンライン



- ❏ ひとりの人間として積極的に関わられる仕事を選び、コントロールするには何が必要か？
- ❏ これからの住宅のあり方、人・地域との関係性とは何か？
- ❏ 人と人との関係性をつくる距離感は、建築によってデザインできるのか？

EXTREME INTERVIEW

編集者という多角視点な仕事の経験を活かして
人と場所、個性を活かした場づくりを

中村 光恵氏

リトルメディア代表

大学院時代に新建築社のアルバイトを経て新建築社へ入社。

『新建築』の編集部を経て『新建築住宅特集』、『JA』編集長を経て2018年に独立。合同会社リトルメディアを立ち上げる。「自分が伝えられることがどれくらい大きな広がりにつなげるかに興味がある、自分と言う小さなメディアとしての発信が多様な可能性へとつながる仕事のあり方を目指している」現在3箇所の拠点をもち、それぞれの場所の個性に合わせた運営を行っている。それぞれの場所で何かを行うことになったきっかけ、広がりをどのように作っていったのか、お話を伺った。



小さな気付きを拾い集めて、 広がりにつなげる

2018年に独立してから、自分が小さなメディアとして何ができるかを考えてきました。その中で、縁やきっかけのある3つの場所でいまそれぞれに事業を行っています。ひとつが新建築社での編集者時代に取材に行って住むことになった森山邸（2005年竣工 設計：西沢立衛）で行っている「もりやまていあいとう」です。森山邸はボリュームの異なる分棟10棟からなる集合住宅ですが、そのうち天井高さ4.3mあるワンルーム「棟（あいとう）」が2020年5月に空室となったのでリトルメディアで借り上げ、そこで「ひととき住人」という時間賃貸にて場所貸しの事業を始めたのです。森山邸という場所をもっとみなさんに知ってもらうこと、それから今後の森山邸の維持管理を目的として始めました。いま少しずつ周知が広がり、意識の高いクリエイターのみなさんがさまざまに森山邸とコラボレーションしてくれています。オーナーの森山さんのセンスや人柄が人を呼んでいるといっても過言ではなく、私はそこを見守りつつ、みなさんとの関係性を構築して行っています。（<https://moriyamatei-aitou.com/>）

もうひとつが私の実家で住宅を開いて行っているマルシェマーケット「いち」です。この「いち」は、母と妹が10年ほど前から実家でやっていました。パン職人の資格を持つ母が焼くパンや、さまざまな物をつくる近隣の作家さんたちの作品などを週に一度販売しています。販売行為は開くためのツールで、買いに来てくださる人たちとの交流がこの場をつくっています。ほかの郊外住宅地と同じように、若いファミリーがいる一方で高齢化、独居の方も少なくないエリアです。そういった方達は街に出ることすらできない人もいます。でも徒歩圏にこういった場所があることで最小単位のセーフティネットになります。小学生が学校帰りにトイレを借りに来たり、もちろん遠方からゆっくりしに来てくださる人もいます。その様子を見て、住宅のあり方の可能性を感じました。もちろん、住宅だけではなくそこに人が何より重要です。リトルメディアとしては、この場所と人の可能性を広げ、かつ今後の住宅のあり方についてを考えていく試みとして、新たな場所「いちごや」の建設を目指しています。（詳細 <https://www.hanakoganei-ichi.com/projects-3>）

それぞれに特徴の異なる場所ですが、小さな点をつくり出し、ボールを投げる距離感を変えるだけでまったく異なる運営や関係性が構築できます。仕事を選ぶというより、そこ

にある何かにどう気づき、自分はそこでどんなメディアになれるのか、常に身の回りの小さな気づきを拾おうとしている感じです。



場所（地域）という不思議

いまもうひとつ、銀座で場所をやっています。2018年からお手伝いすることになったお店の閉店に伴い、別な場所にお店をつくってみることにしました。お酒も接客も素人なので、業態を一言で表すのが難しく、銀座では異色のお店かもしれません。銀座という場所柄、いらっしやる多くはビジネスマンの皆さんですが、人の仕事の話を通して、さまざまな世界の情報や状況に触れることができます。また、こういった場所をひとりどう運営していくかといった時、どのように人と話ができて、その人のことをよく知って「楽しい」と思ってもらえる場を提供できることが何よりいちばん大切です。そのことは、どの仕事においても通じることで、場所、人、仕事はどう変わろうとも、いま目の前にいる人が楽しいとか、笑顔でいてくれるために何ができるか。場所によって関わる人のあり方やボールを投げる距離はさまざまですが、場所と人を考えることは根本的には同じであると、感じています。

デジタルかアナログかではなく

コロナという契機を経て、人と対面せずコミュニケーションするツールは多様化しています。今後の社会はそういった方向により加速していくでしょう。さまざまな関係性づくりが技術によって発展する一方、同じように人と場所の関係性における多様な価値観も増えていくのだと思います。小さなきっかけを拾い上げる感度を持ち続けていきたいです。

- 👉 目的を緩く設定した偶発的な繋がりを生産活動に活かすには？
- 👉 これから若者に選ばれる組織・空間・街とそうでないものと違いは何か？
- 👉 リアルに限らない新しいコミュニティの形とは？

EXTREME INTERVIEW

20代前半を生きる

若手クリエイターたちのコミュニティの作り方

片桐 結氏 高橋 ランディ氏
Takumi氏

Fuelwa-1

20代前半のクリエイターを中心としたコミュニティチーム。

桑沢デザイン研究所のスペースデザインコースや文化服装学院のメンバーが中心となり、2020年に結成。スペース、イベント、ファッション、プロダクトデザイナー以外にもフォトグラファーやサイエンスを学ぶ学生、画家など多様性のあるコミュニティだ。「同じ歳のデザイナーだったりクリエイターとかを目指している子たちとの会話の回数がすごく減ってしまったり、みんなが今何してるのかっていうのが全然わからないっていう状況の中で、じゃあせっかくだからそんな人たちをそれぞれ集めて、みんな今何やってるのとかどんなことを目指してるんだっていうのを共有できるコミュニティがあったらいいなっていうところから、Fuelwaの1回目が始まりました。」と片桐さん。

片桐さんはイベント企画運営団体で副代表を務めるなどし、桑沢卒業後『engivy』『Fuelwa』を立ち上げ、Fuelwaでは運営、企画や空間系のデザインを担当する。高橋さんは多摩美術大学美術学部絵画学科油画専攻卒。平面、立体共に作品を制作。自身の身体的、社会的なルーツをテーマとして扱う。

Takumiさんは、文化服装学院卒業後、服の型紙を作る「パタンナー」として仕事をしている。コロナの時代に20代前半を過ごす彼らに今想うこと、これからのことなどを赤裸々に聞いた。

浅草に拠点を構えた理由は
不動産会社と街の応援体制にある

浅草に構えた理由は、シェアアトリエをいろいろ出している不動産会社さんがあったんですね。そのうちから、1年目のクリエイターを応援しますよみたいな、企画書を出してくださいっていうのがありまして。その不動産会社さんがリノベーションなども含め応援して下さる会社さんだったのでこの場所を選びました。他の階に入居されてる方も距離感が結構近くて、2階もドアで仕切られてないので、フラット「お久しぶりです、最近どんな感じですか？」みたいなのでいろいろ相談に乗ってくださったりとか。

浅草っていう場所もあるので何かイベントを開いたりだとかということを考えています。あと浅草は工場であったり、ファッションの方でいうと革屋さんも多いので、ものづくりの街だからいろいろこっちは動きやすいんじゃないかっていうのもあります。

主要メンバーはそれぞれ違う場所でも働いているので、全員が揃うのは土日です。他のメンバーはふらっと遊びに来てくれる状況ですね。Fuelwaとはとにかく集まってやってみようのところからスタートしてしまったので、明確な目的っていうのがちょっとしばらくなかったんです。運営側で共有しているのは、『豊かな時間を纏う』というテーマです。物だけではなくて、どういう時間を過ごせるのかみたいなところをフォーカスしています。

貢献できる規模と距離感を
どうキープするかを考えている

高校のときイベント企画運営団体をやっていました。それこそ1万3000人を代々木第1体育館に呼ぶことが、私達の目的みたいなところだったんですよ。人を集めることが良かったので、それを思うとコロナっていうのを考えるとだいぶ悔しいところがあります。でもFuelwaでは、やっぱり参加しているメンバーの関係性がしっかりできるんで、今の人数がちょうどいいっていうのもあるんで、その楽しさはまた違ったものとしてあります。規模感は、今がちょうどいいかなって。というのも、人が増えすぎてしまって、久しぶりに会った時に誰も知らないっていう状況はそんなに作りたくないっていうのがあって。

やっぱり密な関係を作ってもらいたいっていうのはすごくあります。コミュニティで何万人会員にしますとかそういうのではないのです。数万人の若者イベントはいつでもできますが、今ではないと思っています。

共感の輪を広げる手段はSNS

活動を広げていくのは、私の中ではSNSが結構大事だったっていうのは思ってます。私が今メインで動かしているのはTwitterなんですけど、そこでいかにいろんな人に見てもらえる機会を作るかとか、それが広まるようにするか、継続的に私達のことを見たい、フォローしたい、とにかくストックしておこうって思えるきっかけをいかにして作るか。企画とかで、例えばリノベーションのこんなお出かけスポットありますみたいなのをひたすら発信していったりとかっていうことで考えてますね。

📌 Interview / 2021.08.08 Fuelwa @ 浅草



- ✎ 他業種からの刺激、継続的な知識獲得を得る仲間づくりはどうしたらできるか？
- ✎ 人の人生を後押しするデザインってなんだろう？
- ✎ 世代をこえた共通言語って何だろう？

EXTREME INTERVIEW

自分のキャリアを
しなやかにしたたかに積み上げる

山下 ぼぶ氏 三富 瑠音氏
黒沢 鑑人氏 Showhey氏

Fuelwa-2

20代前半のクリエイターを中心としたコミュニティチームインタビューの第二弾。

山下さんは桑沢デザイン研究所卒業後、『Bergere』を設立、現在は『Bergere et Paysans』として活動中。CGを用いて言葉遊びから着想を得るといって、独創的なテーマで作品を数多く生み出す。三富さんは明星大学デザイン学部卒業後ゲーム開発会社に勤務。キャラクターやゲームの世界観のデザインから、グラフィックデザイン、企画、シナリオ作成と幅広く活動。フォトグラファーの黒沢氏は日大芸術学部を卒業後、撮影スタジオで修行中。『既成概念を壊す』というテーマでシュールな作品を生み出す。Showheyさんは、現在東京農業大学生命科学部バイオサイエンス学科在学中。

多様性のある彼らはなぜここに集まり、それぞれがどんな未来を見ているのかについて話を伺った。

コロナとキャリアスタートが重なり激震

コロナの影響があるかないかといったらある。それが良くも悪くもあるなと思っていて、現実問題、コロナがなければ、前いたインテリア事務所いゆる会社員として続けたままだったと思います。コロナが卒業間近ぐらいから出てきたのでそれに合わせてガラッと変えていかなきゃいけないんだっていうのは自分の中でどうしてもありまして、その中で何ができなくなって思ったときに、行けるような場所にも行って、自分がやりたいことを実現させるような人側に回っていきなさいなと思い始めてこうなっていました。今はすごく楽しいです。(山下氏)

農大なのに実験が全くない！

コロナになって実験がなくなったんですよ。オンライン授業の送られてきたバワが開いたら、先生がこうやって今何ml入れましたとかやってるんですよ。しかも課題がその横から写真撮って「これは何ml入ってますか」みたいな。そんなの小学生でもわかるじゃないですか。二浪までして農大に入ったのに。友達なんかできるわけでもないじゃないですか。みんなバラバラになっちゃって、あんまり学校に来なくなったりとかやめちゃう生徒が増えたりとか。だからではないのですが、ここ顔を出しているのかもしれない。Fuelwaでは「何作ってんの」から始まる会話が心地よいのです。

ちなみに将来の夢は？の質問はもうオワコンです。将来何になりたいとかっていう質問がもう駄目なんじゃないかなみたいな、職業で縛るのか。みたいな感じがしています。(Showhey氏)

自分が動けば上司が教えてくれる

私は会社に属して本当によかったなって思ってます。新人が動けば、何でも喜んで教えてくれるんですよ。盗めるものいっぱい盗めるのラッキーって感じですね。「嫌な会社、楽しいFuelwa」っていうよりはもう地続きで楽しい。あんまりどこで何をみたいなことではなく、何か得られる知識が違うだけで、どこに行っても自分が動けば、もらえるっていうか、新しい知識は入ってくると思います。(三富氏)

退社のタイミングは決めている

今の会社は3年目の夏のボーナスをもらったらもうやめようって決めてるんです。やめて好きなカメラマンさんのアシスタントにつくのか、海外行くのか。いろいろ選択肢はあると思うんですけど、その時自分のやりたい方に進めていけるように、今のうちにお金貯めたりとかっていうことをしています。

これっていう最終目標はないのですが、ただあまりストレスがない生活はしたくないし。ストレスとか抑圧とかってすごい自分のやりたいこととか欲求のエネルギーになると思うんで、どこまで行っても満足はしたくないですね。Fuelwaは10年後20年後とかに、仕事を回せたりとか頼めるような間柄になりたいというので始まったので、コミュニティとしての存在意義は「保たせたい」じゃなくて、10年後20年後に実現するための過程だと思ってます。(黒沢氏)

Interview / 2021.08.08 Fuelwa @ 浅草



👉 自分は幸せな働き方を選んでいるという
満足感を生み出す環境をどうつくるのか？

👉 共感や感謝の気持ち呼び起こすデザインとは？

👉 パンデミックにロックダウンしない街を
どうデザインするか？

EXTREMER INTERVIEW

大組織から起業、
コロナを経て手に入れた
Wellbeing な暮らし

Ashley Hain氏

ヘルシードリンク会社CEO

中国系アメリカ人のアシュリー・ハーンさん。幼い頃東京にも住んでいた経験がある。BIG4と言われる会計事務所のPWCからキャリアをスタートし、いろいろな企業のコンサルティングをするうちに、やっぱり「サステイナブル」そして「健康的」この二つをとて大切にしたい会社とあって仕事をしたいと思い、TOYOTAのアメリカ本社に入社しプロジェクトマネージャーを歴任。

4年前にTOYOTAがカリフォルニアからテキサスに移るのを機に、いろいろと判断して、カリフォルニアに残り、自分の会社を起業。今は100%ヘルシーな商品（ココナッツドリンクや生姜のドリンク）などをスーパー、ホテルやコーヒーショップなどに提供する2つの会社を経営している。

カリフォルニアの今や、アシュリーさんの価値観について聞いた。

飲食業界は激震したけど 旦那さんとは前よりも仲良くなった

私の会社では今11名雇っています。コロナ以前から在宅で働いていたので、あまりインパクトはなかったのですが、2020年の3月にアメリカで一番大きい展示会であるEXPOが1日前にキャンセルとなり、大きな損害が出ました。それが私たちの業界の現状でした。その後、色々なスーパーのバイヤーとのミーティングも全部Zoomに変えました。コロナ前は会ってまず30分ランチしたり、お話ししたりというのが普通だったのに、全てのミーティングがキャンセルになるか、Zoomになったのが大きいインパクトでした。結果、夫婦2人で家にいる時間が今までよりもすごく長くなりましたが、びっくりするくらいこの人というとなんか楽しいなって、また再確認したような気がします。

外出禁止令を経たLAの現状

去年4月に外出禁止令が出て、2週間以上続きました。海にも入れませんでした。レストランも全部閉まっていて皆がずっと家にいました。今はマスクしてる人は少なくなりました。ワクチンもほぼ60%の人が打っているのです。でもレストランなど室内だったらマスクはまだ絶対必要です。

ニュースはもちろんアップデートしてます。チャンネルがありますが、今年は感染者数の話は少なくなりました。何か知りたいって思ったら、インターネットで調べれば全部書いてあります。

ダウンタウンにはホームレスがたくさんいるんですよ。何千人もいますよね。シティーは危ない場所が結構多くなってきています。みんな昔はダウンタウンに住んでたけど、もう郊外に移りたいっていう人たちが増えて、郊外の家の金額がすごく上がっています。

📌 Interview / 2021.08.19 オンライン

綺麗=WELLBEINGの秘訣は 感謝の気持ち

Wellbeingのためにできるだけ毎日感謝をするようにしています。ちょっときついなって言うことはほぼ毎日あるんですけど、やっぱり地球に感謝。あとはこの空気に感謝。ベランダでちょっと仕事してるときにちょっと風が肌に当たる瞬間とか、気持ちいいじゃないですか。その時にできるだけ、この細胞に感謝とかね。

あともう一つは、女性ってやっぱり他の人をもっと大切にしようとか、他の人をテイクケアするのが簡単にできるんですよ。旦那さんのためにご飯作ろうと思うのはすごく簡単で。でも自分ために何かしようって思うと、明日でもいっかとか思っちゃったりもするので、できるだけ自分にもっと時間を与えて、自分にもっと愛を与えるようにしています。



コミュニティの中に クリエイティビティが欲しい

今友人とも話して将来これは実現したいという夢を伝えます。すごいと思うのが、これからのコミュニティってクリエイティビティが欲しいって思ってるんですよ。それが実現できるビルを作りたい。しかもアウトドアスペースがいっぱいあった方がいいと思います。風も気持ちいいし肌にも良さそうだって思ったり、だから外で仕事するのは素敵だなんて思いますね。

- 👉 オンラインでも、リアルと同等に深い人間関係を築くことはできるか？
- 👉 雑談が生まれやすい空間をどのようにデザインするか？
- 👉 「また会いたい。この人と仕事したい」と思われる魅力的な自分になるには？

EXTREME INTERVIEW

雑談中から
会話が生まれ、呑みが生まれ、
信頼が生まれ、仕事生まれる

清水 祐亮氏

元TRUNK HOTEL 営業 マネージャー

大学時代は100メートルで日本代表20歳以下のアジア選手権で銅メダルを獲得したアスリート。社会人になるのを契機にスパットと辞めて、ウエットスーツやファッション関連会社アパレル業界を経て広告代理店へ。その際に関わったイベントの縁でトランクホテルに出会う。

「今までは業種を決めてそこで営業をする先はもう決まっ
ていて、どうしても自分の広げたい人脈なかなか広がらない
という形ではあったんですけども、トランクホテルという
ホテルの営業は、基本的に箱を売る形なので、簡単に言っ
てしまえばどこへでも営業できてしまうので、人脈を広げる
にはなかなか適している場所だな」と語る。

コロナ禍においても衰えることのない清水さん流の営業ス
タイル、そこから見えてくるコミュニケーションや人付き合いに
関する価値観を伺った。

現在はフリッツ・ハンセンに勤務。

独自の営業スタイルはひと笑いさせること

トランクホテルの営業の基本的な業務としては、最初テレ
アポをして、アポイントをとって、ホテルの紹介をして、とい
う形。ただ、アポイントが取れて紹介して、「使ってください
」で終わってしまうと、使う機会までに時間があったりだ
とか、なかなかタッチポイントが増えないので、どちらかとい
えば、1回紹介してからが勝負だと思ってまして。いかに仕
事に繋がるまでに濃い接点を持つかに、私は比重を置いて
います。そこでお酒の力を使って、一番最初に「こいつ楽しい
」と思わせるのが営業だと思うので、行き始めたときに、
絶対ひと笑いさせるっていうのをコンセプトにしています。

深い関係になれるかの可能性を、最初の30分で嗅ぎ分け
るのです。「この人ちょっとプライベートが気になるな」と思
わせたならもう勝ちかな、みたいな。その時、2回目以降の会
う約束を必ず取り付けるようにしてました。必ず飲みましょ
う、飯食いましょって言うのを最後のキーワードにして、必ず
その場でスケジュールを見てもらってアポイントをとって、次
にどんどん繋げていくっていう形で営業してました。

コロナによって会う人が精査されてきた

オフラインでしか感じられないその人の表情だとか空気。
自分としてもやっぱり人は好きですが、直接会いに行くのが
難しい時代になりました。したがって、会える人も結構精査
されました。こんな状況の中でも会ってくださる人とは、
会社の看板関係なく本当に深い付き合いをさせていただいて
るような形ですね。緊急事態宣言下でもずっと会っていて、
今後についての仕事だとか、いろんな話もできたなってい
うのはありますね。

📌 Interview / 2021.08.18 SCAPE @ 白金台

メインの仕事は雑談
ただし会話の原則は聞き役

自分はオフライン主義です。お題が必要なオンラインは
荷が重いですね。自分のオフィスに行った際も挨拶は「最
近どうよ？」です。客先の皆さんも「何か話に来いよ」みた
いな感じで、みんなアポイントをくれるのです。で、客先に
何をしに行くわけじゃないんですけど、とりあえずオフィスに
行って、そこの社食に行ったりだとか、本当にお茶しに行く
だけだとか、あと会社によっては入館証も持ってます。と
にかく雑談に行く。で、お客さんと話して、ちょっと笑
わせて帰るみたいなのが結構日々のルーティンで、夜も
変わらないですね。基本的にはお客さんが楽しんで、爆
笑して、意識を失うくらい飲んでくれて楽しかったみた
いな感じが1日っていうか、1週間ずっと毎日のようにや
ってるような感じですよ。

ただし会話は、基本は僕の話はあんまりしないです
ね。全部聞き手。どちらかというとパーソナルなもの
が多いですね。やっぱり人は聞くより話した方が気持
ちいいので、時間すぐ流れると思います。苦はない
と思うんで、基本的にはその人のことを根掘り葉掘り
聞いて、その人のことを知ること、その方に気持ち
良く時間を過ごしていただけるように会話をします。



- ✎ 生活しているだけで健康になれる建築やまちをどのようにデザインすべきか？
- ✎ 世代間分離や都心の孤立など、コミュニティ醸成を促すために必要なものは？
- ✎ DXや自動運転などのテクノロジーで実現できる健康なまちづくりとは？

EXTREME INTERVIEW

医療界を改変する若き精神科医が描く
医療と街の未来

田澤 雄基氏

精神科医・研究者・経営者

開業医・経営者・研究者の「3つの顔」を持つ32歳の精神科医。MIZENクリニックにおいて、臨床医としての日々を送りつつ、医療系ベンチャー「LiFE Investors」（ライフインベスターズ）創業者、慶應義塾大学医学部で研究も続けるという、異なる3つの顔を持つ。同大医学部時代に医療ITなどを手がける「エスティム」を起業、「AppliCare」という医療用アプリのビジネスコンテストを企画するなど活動は多岐にわたる。

(関連WEB:MIZENクリニック豊洲内科

<https://www.mizenclinic.jp/syoukai/>)

COVID19による医療現場の実情や医療従事者の働く環境のあり方をはじめ、日本の医療業界の構造的課題、まちづくりや空間設計との関連、この時代に煽りを受けている世代や地域の声から浮き彫りになる社会課題、そしてまちの未来についてお話を聞いた。

治療だけでなく予防へ
生活環境病というコンセプト

予防については、治療に比べてエビデンスは少ないですし、データでは捉えきれない個人ごとの個別的な要素が大きいため、これから発展していく余地が大きいと考えています。さらに、予防と治療だけではなく、医療で治せなかったものを見る、つまり障害を含めた病後のケアも大事になっていくでしょう。治療だけではなく、予防や病後ケアを考えていく上で重要なのは、その人個人の性格や習慣も含めた生活環境全体を捉えていくということです。

さらに、例えば住むあるいは働く建物、属する組織、あるいはその中で発生するコミュニケーションですとか、単に個人の習慣に閉じない社会の中の広い物理的社会的要素を俯瞰的にみることです。

都市も地方も一長一短がある

例えば認知症の予防には、歩行量の観点から都市生活の方が有利であるということを示唆する研究があります。一方で、都市部では世代間分離の問題を背景に、孤立している高齢者が多い割に、介護福祉のリソースが不足しているという報告もあります。このように、健康に生きるためには、都市と地方とで比較しても一長一短があり、最適な居住環境というのは多様性がある問題だと思います。

環境変化に
柔軟なコミュニティ作りが鍵

世代間分離における孤立の問題は従来は主に高齢者で顕著でした。一方で今回のコロナ禍においては、若い方でも孤立の影響を受けるようになったと思います。そうすると高齢者における居住環境と同じく、若い世代でも例えばどのような組織や働き方が最適なのか、という問題が浮上します。

産業医の立場で見ていて、リモートメインでコミュニケーションが取りづらく不調を起こす方や、逆に出勤が必須の部署で感染不安から不調を起こす方を多数見てきました。リモートと出勤どちらが最適かという問いに対して、個人の内向性と外交性のバランスによるという研究データもあります。環境変化や個人の特性に応じて、ひとりひとりの生活をサポートできる組織やコミュニティが求められる時代になってきていると感じています。

DXは都市集中や
孤立問題の解決策になる

我が国では医師不足や都市への偏在が大きな問題になっています。オンライン診療などのDXは単に医療の効率化だけではなく、このような社会問題の解決策にもなり得ます。自動運転などのテクノロジーが発展すれば、医師は移動中にもオンラインで診療が可能になります。これによって地方での医師不足が緩和すれば、地方の活性化や孤立問題の解決につながります。高齢者の自宅に医療者が通いやすくなるというのももちろんですが、医師をはじめ若くて地域を活性化する力のある働き手が都市から分散していけば、地域コミュニティの再構築につながります。そこで暮らす人々の認知症予防にもつながり、一極集中が緩和することで国全体が今回のような感染症にも強くなるでしょう。

🗨 Interview / 2021.10.29 オンライン



- ✎ 我々は子供と大人の社会の架け橋になっているだろうか？
- ✎ 子育てママのネイティブ自粛生活から学ぶことは何か？
- ✎ 失敗を許容できる社会や組織をどうデザインすべきか？

EXTREME INTERVIEW

保育士はファシリテーター

子どもを通すと見えてくる社会やコミュニティのみらい

小竹 めぐみ氏 小笠原 舞氏

子どもみらい探求社・保育士起業家

親子で通う、オンライン保育サービス「おやこ保育園」やお子さんを通じたまちづくり活動などを行う子どもみらい探求社を経営するお二人。東京生まれの小竹さんは6年前に京都に移住。



本町エスコラという現代版の長屋コミュニティに住んでいる。隣の伏見区にあるもう一つの町家のシェアハウスにも拠点があり2拠点を行き来して生活をしている。「夫と分担しながら、距離感をすごく大事に見つめながら、自分らしさも大事にした暮らしにチャレンジ中というような人間です。」と語る。5歳のお嬢さんがいる。小笠原さんは埼玉県川口から2016年の春に神戸に移住し、現在は長田区に在住。「うちの町は多文化共生をうたっている町。高齢者や外国籍の方も多くいて、様々なバックグラウンドを持つ人たちが混じり合って暮らしています。そういう環境で子育てしたいなと思ったのと、自分もいるのが心地よかったのでこの暮らしを選びました。」と語る。3歳の息子と柴犬と暮らす。

今回は「子ども」をキーワードにコロナ禍におけるお二人の価値観についてお話を伺った。

子供の世界と大人の社会というものの架け橋になりたい

子どもみらい探求社は読んで字のごとくですね、「子供の世界」と「大人の社会」というものの架け橋になりたいなと思って作った会社です。元々どちらも保育士の経験があるのでそれを活かし、家族・子供・子育てに関して、企業や行政の方と色々な角度でコラボレーション事業を展開しています。建築業界の皆様とも一緒にした際には、フィールドリサーチや場所を作るお手伝いをさせていただきました。地域作りにおいても、家族というキーワードは外せません。いろいろな文脈から、「子供たちにとって本当に良い未来」というものをつくっていくのが私達です。また、私達が運営する「おやこ保育園」は口コミで話題に。ありがたいことに書籍化もしましたし、常設園もでき、開設を監修をさせていただくなど、様々な展開が見られています。



オンラインサービスへの進出はコロナによって実現した

去年クラウドファンディングをして約400万円を集め、対面式でやっていたサービスを完全にオンラインに切り替えました。すると逆に今まで出会えなかった地方の方々にアクセスできるように。お仕事自体の数は減りましたが、逆にコロナだったことによって起こったメリットもありました。



マスクしない相手=家族 コミュニティ体感の動線が弱い

じつは0歳のママってネイティブ自粛生活なんですよ。おやこ保育園で聞こえてきたママたちの悩みなどの声は、コロナの前後でそんなに変化もないんですよ。むしろコロナによって、その大変さに家族が気づき、周りが聞く耳を持ってくれ始めた、という感じがありました。孤立する親が増える今、近隣の人をはじめ、周りの人に頼る力も必要だと思っています。しかし、頼りたいと思いつつも頼り方がわからない人たちも多にいる昨今。頭ではわかっていても、実際に頼るまでの動線がすごく弱い気がしているのです。その矛盾との戦いがすごくあるなと思っています。



子供は失敗すると 心のポケットに学びが多く入る

子供の失敗を叱るか、失敗しないように準備するかで悩む親御さんは多いのですが、失敗させてあげることで得られるものは多くあります。ただ一方的に人から教えてもらったことってすぐ忘れてしまいますよね。自分が実際に痛い目に会うことで、心のポケットに学びが多く入るんですよ。コミュニティも企業も社会も失敗を許容して「一緒に成長していくスタンス」を持てるようになるといいですね。

HP: <https://kodomo-mirai-tankyu.com/>
問い合わせ先: info@kodomo-mirai-tankyu.com

Interview / 2021.11.11 オンライン



制作 東京本店 イノベーションチーム WI²



編集・デザイン 株式会社 SCAPE

発行日 2022年6月
著作権は原則竹中工務店に帰属します